慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウィリアム・シャイラー著 井上勇訳 第三帝国の興亡 : ヒットラーの抬頭
Sub Title	William L. Shirer; The rise and fall of the third reich, translated by Isamu Inoue
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.7 (1961. 7) ,p.583(67)- 587(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19610701-0067
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610701-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うに扱って、資源配分の efficiency を維持しようとするものであるが、公共財の特殊性は価格を指標とする民間市場のメカニズムをはばむものであったのである。後者は課税による満足の犠牲をいかに評価するかによって異なった実行方法が考案されるが、いずれにしても社会的 equity の理念に立脚した原則である。著者はつづいて政策の拠るべき価値基準の形成と、取引に替わる評価のプロセスとについて、いわば多数決の原理を紹介する。

便益原理が実行上の問題として、公共財の合理的評価とその費用の配分方法を見いだしえない以上、政府の調達費用はまったく個人の犠牲負担として、公共財による欲望充足とはきりはなして扱わざるをえない。そうすれば、政府の徴収する租税は完全に民間財の自由な消費・生産への干渉であり、資源配分の efficiency の面でも、ここに超過負担 excess burden の問題が生じる。ここまでが本書第二部の内容となっている。第二部は費用調達方法の二原則、efficiency と equity との厚生分析の展開であり、一、二部を通じて、公共欲望の二形態である social want と merit want の経済学的性質についての立入った分析は不十分である。とくに後者の外部経済効果、さらに公共投資といわれるものの位置づけに触れるところが少ない。

第三部は予算政策が民間経済活動に及ぼす効果のミクロ分析であり、伝統的な帰着論の発展として、本書の最も重要な部分を形づくっている。ミクロの効果は消費者の所得―余暇の選好、時間選好に及ぼす効果、生産者の費用曲線に与える効果、投資者の資産選択に与える効果に分かたれて分析され、さらにそれらを綜合した一般均衡論的分析に及んでいる。

効果は資源の移動と所得分配の帰着の二つの主要観点から判断される。これに産出効果として国民生産物水準に及ぼす効果がつけ加えられるが、これは第四部のマクロ分析に移されている。

第四部は「補整的財政」とよばれ、有効需要水準および経済成長率に及ぼす財政政策の効果が、詳しい代数的説明で展開され、さらに公債論が付け加えられている。第四部はとくに財政政策の理論の集大成としての、貴重な文献となりうる部分である。

以上の四部から成る本書は次の二点で財政学を体系化したものということができる。一、政府の予算政策の目的を明確にしたこと。二、予算の実行に関する原則の厚生分析と、予算の実行が経済活動に及ぼすポジティヴな分析とを識別したこと。従来の財政学におけるおびただしい貢献はすべて、この体系化によってそれぞれの明確な位置づけを与えられたのである。われわれは財政学の内容についての新たな反省の機会を与えられる。とくに、このような体系化の下で、三つの予算政策の目的にかなった租税の具体的な種類と大きさが決められるとしたなら、費用としての課税が efficiency に及ぼす効果―超過負担の問題はほとんど意味がなくなるであろう。なぜなら租税はかかる efficiency を達成するための手段であって、単なる費用調達の手段ではなくなるからである。また、公共財の提供のひとつの大きな理由が外部経済効果にあるとするならば、消費者優位の下での資源の最適配分の条件はいかに修正されなくてはならないだろうか。本書を出発点として、公共経済の性格をさらに深く認識することが財政学の役目であろう。

大部の書物であるから相対的には多いとはいえないかもしれないが、ミスプリントをかなり散見する。第三部までで気づいたところの主なものを左にかかげておきたい。

頁	行	誤	正
155	19	higher	lower
219	17, 24	P_1 and P_2	それぞれ P_2/P_1 および P_1/P_2
同上	（脚）2	$-p_2^y Q_2^y$	$-p_2^y Q_1^y$
同上	（脚）6	$-p_1^y Q_1^y$	$-p_1^y Q_2^y$
同上	（脚）7	前記等一カッコ内の分子の $p_1^y Q_1^y$	$p_1^y Q_2^y$
220	10	$-\Delta w W_1$	$+\Delta w W_1$
同上	14	$\left(\frac{w_2}{w_1}-\frac{P_2}{P_1}\right) W_1$	$\left(\frac{w_2}{w_1}-\frac{P_2}{P_1}\right) W_1 W_1$
同上	22	$\frac{W_1}{W_2}$	$\frac{w_1}{w_2}$
同上	（脚）2	$-\Delta w W_1$	$+\Delta w W_1$
同上	（脚）3	$+p_2^y Q_1^y$	$+p_1^y Q_1^y$
237	（脚）17	$y\varphi_{yy}$	$\varphi_y+y\varphi_{yy}$
259	17	The largest yield は N点	AB の平行線と CVA との切点
274	19	HM	HA
325	（脚）5	（MW－VM）	（MW－VW）
349	11	case 3	case 4
同上	12	case 4	case 3
367	13	$ 20	$ 10

ウィリアム・シャイラー著
井上　勇　訳

『第三帝国の興亡――ヒットラーの抬頭――』

飯田　鼎

第二次大戦争後、ドイツ・ファシズムの本質を分析し、その正体を明らかにしようとする意図をもって、非常に多くの著作があらわれ、そのいくつかは邦訳されている。アウシュウィツのユダヤ人収容所における人間業とも思えないナチスの残虐な所業についての生々しいドキュメント、フランクルの「夜と霧」は、われわれの魂をこごえさせるほどのものであったが、このような人類の歴史上にも稀な犯罪をおかしたナチス、とくにその指導者ヒットラーとは一体どういう人間であったか、また彼を生み育てた第一次世界大戦後のドイツの精神状態、フリードリッヒ・マイネッケの言葉をかりるならば、「不幸な歴史的な転換」と数奇な運命に翻弄されたドイツ民族のナチス思想への傾斜、これらについては、しばしば語られも

し、また論じられたものであった。

だが、これらの興味ある問題を、本書ほどヴィヴィッドに描いている書物は少ないであろう。著者ウィリアム・L・シャイラーは、アメリカにおける有数のナチス研究家であり、第二次世界大戦前から、「シカゴ・トリビューン紙」の特派員として英独に駐在したジャーナリストであって、ヒットラーがウィーンの下町の安宿に失意の生活をおくっていた浮浪者としての少年時代――第一次世界大戦の前夜――から名もなき煽動家、やがて一党の党首となり、ついに政権を掌握してドイツを征服し、ドイツ民族およびヨーロッパに破滅をもたらすまでの経緯を、光彩陸離たる文章をもって描いている。本書の原文は、一、二五〇頁の大冊であって、邦訳は五巻から成り、ここにとりあげたのはその第一巻である。つぎのような内容から成っている。

第一部　アドルフ・ヒットラーの抬頭

一　第三帝国の誕生

二　ナチ党の誕生

三　ヴェルサイユ、ワイマール、ビヤホール・プッチ

四　ヒットラーの心理状態と第三帝国の根源

第二部　勝利と地固め

五　権力への道＝一九二五―三一年

六　共和国最後の日＝一九三一―三三年

七　ドイツのナチ化＝一九三三―三四年

著者は、つぎのように云っている。「一部のドイツ人、そして疑いもなく大部分の外国人にとっては、ベルリンで山師が権力の座についたように思われた。しかし、大部分のドイツ人にとっては、ヒットラーは真に天与の指導者の後光をそなえていた――少なくとも、間もなくそうなった」（一九頁）。

著者は、画家になろうとして失敗し、建築学校に入学しようとして果さず、失意の生涯をおくりつつあった第一次世界大戦直前のウィーンの爛熟した文化のなかで、「ちゃちな製図家、水彩画家として」口を糊していたヒットラーが、「身についた職業としては何ひとつなく、手でする仕事を軽蔑しながら」、しかも「プロレタリア、肉体労働者の階級に転落することをおそれるプチ・ブルジョアの不安を絶えず持っていた」（三八―三九頁）とのべているのは興味深い。著者は、青少年時代のヒットラーの人間形成に、もっともあずかったものとして、このウィーンでの生涯を重視し、「わが闘争」にあらわれた彼のこの時期の精神的発展の過程を克明に追求しているのであるが、注目すべきことは、のちに「ナチズム」と呼ばれたアドルフ・ヒットラーの理念の蕾は、「二〇世紀の初頭における混乱をきわめたオーストリアの政治と生活から、生のままで拾いあげられたものであった」（四三頁）という事実である。ハップスブルグ王国としてのオーストリア・ハンガリアでは、何百年にもわたって、少数のドイツ系オーストリア人が、十指にあまる雑多な他の民族を支配しつづけてきたが、いまやその支配は危殆に瀕し、オーストリア社

会民主党の指導のもとに、労働者階級がその勢力を拡大し、またこれと同時に民族的自治を要求するスラヴ系諸民族――チェコ人、スロヴァック人、セルヴおよびクロアト族の運動が次第にやかましくなった。こうした民主的・民族的運動の昂まりにたいして、狂信的なドイツ・オーストリア国家主義者だったヒットラーは、はげしい憤りを感ずるとともに、スラヴ民族にたいする蔑視や社会民主党にたいする猛烈な憎悪を抱くようになったというのである（四四頁）。この点についての著者の叙述は、まことにすばらしく、文章（邦訳）もまた魅力的である。

やがて第一次世界大戦がはじまり、今迄徴兵を忌避していたヒットラーは、バイエルン連隊に志願して許可され、第一次世界大戦の異常な体験のなかに、狂信的盲目的な愛国主義者となってゆくのである。ドイツの敗戦を経験した彼は、その責任を、《十一月の犯罪人ども》、すなわちドイツ社会主義革命を指導したローザ・ルクセンブルグや、カール・リープクネヒト等を中心とするスパルタクス団（左翼社会民主主義者）に帰せしめたが、このような見解は、軍事的崩壊がルーデンドルフによれば不可避であったことが明らかであったにもかかわらず、当時多くのドイツ人の間に、「戦争では勝ったのだが、『背後からの一撃』で打倒された」という思想のなかにもっとも支配的に見られ、このような国民の心理を巧みに利用しつつ、デマゴギーをもって宣伝を開始するのであって、その母体となったのは、一九一九年当時、ミュンヘンに存在したドイツ勤労者党

という、ちっぽけな政治団体であった。

第一次大戦末期の軍事的崩壊にともなう革命的状勢の到来、この間における保守的な支配層の狡猾な心理について著者はつぎのように描いている。「保守主義者、ルーデンドルフ、ヒンデンブルクなどの軍の指導者たちは、政治権力を、気のりのしない社会民主主義者の手におしつけてしまった。そうすることによって、彼らは降伏文書、やがては平和条約に署名調印する外見上の責任を、これらの民主的労働者階級の指導者の肩になわせ、ドイツの敗戦責任と、敗戦と強要された平和が、ドイツ国民にもたらした苦難のいっさいの責めを彼らに転嫁することができた」（九三頁）。

ヒットラーは、こうしたヴェルサイユ条約につづく不運なワイマール共和国の陰影のなかに、次第に成長し、とくに一九二三年に至って頂点に達した猛烈なインフレーション――一ドルが四〇億マルクになった――によって、その勢力を飛躍的に増大せしめるチャンスをつかんだ。バイエルン州政府の危機に乗ずるヒットラーの陰謀は失敗に帰したけれども、それが逆に英雄視され、指導者としての彼の威勢を強める結果となった。このようなナチスの勃興の背後にあったワイマール体制の精神的ムードについて、著者が、つぎのようにのべているのは重要である。「反逆罪は、共和制の支持者には情け容赦なく適用されたが、共和制を転覆しようと企てた右翼のものは、やがて間もなくアドルフ・ヒットラーが身をもって経験したように、無罪放免になるか、もっとも軽い刑をいい渡されて、ことず

みになった。暗殺さえも、犯人が右翼で、被害者が民主主義者の場合は、裁判所で寛大にとりあつかわれ、あるいはたびたびそういうことがおこったが、軍の将校や極右の連中が手をかして、裁判所の手の及ばぬところへ逃亡させられた（一〇五頁）。この表現は、ひとり一九二〇年代のドイツにとって象徴的であるばかりでなく、ある程度新ワイマール体制ともいうべきわが国の場合にもあてはまるのではなかろうか。

バイエルンにおける蜂起、いわゆるミュンヘン騒動の失敗は、ナチスの発展にとって大きな飛躍の舞台となり、更に一層の発展のチャンスをつかんだヒットラーは、一九二九年の大恐慌によって、ドイツ資本主義が壊滅的な打撃をうけたとき、圧倒的な勝利をしめることとなった。何百万という失業者、悲惨のどん底に喘いでいた労働者、中小生産者層にたいして、ヴェルサイユ条約の破棄、賠償支払いの拒否、失業者の救済、金権政治の打破というようなデマゴギーをふりまき、一九三〇年の選挙には、六、四〇九、六〇〇票を得、議会に一〇七の議席を確保し、第二党に進出した（二二一頁）。

ワイマール体制末期のドイツの状態、ヴェルサイユ条約の重圧とはげしい階級対立に悩み、息づまるような雰囲気の中に暮していたドイツの勤労者・小市民階級にとっては、その鬱積した憤懣を、何物かに托して発散しようという気運がみられた。著者は、この当時の状態をつぎのように表現している。

「一九三一年が、職を失った給料生活者と、破産に瀕した中産階級と、土地を抵当に借り入れた借金の支払いができない農民と、半身不随になった議会と、よたよたした政府と、急速に老衰してぼけて行く八四歳の大統領をかかえて、不安の道をたどっているとき、ナチの首領たちの胸中には、もはやあと長くは待つことがいらないだろうという確信が高まっていった。グレゴール・シュトラッサーが公然と誇ったように、『破局を促進するものはすべて、なんであれ……われわれにとってと、ドイツの革命にとってよろしい、大いによろしい』のだった」（二三八―二三九頁）。

とはいうものの、われわれは、共和制の最後の段階ともいうべき一九三一年から三三年にかけて、ドイツの政権が、きわめて自然に、いわば「棚ぼた」式に、ヒットラーの手におちたと想像してはならない。ヴィルヘルム帝国の栄光もすでに薄らぎ、老衰して側近の意のままに動く「カイライ」と化した大統領ヒンデンブルクのもとで、ブリューニング、フォン・パーペンそして共和制最後の首相シュライハーののちに、ヒットラーが首相に任命されるまでには、ヒットラーとナチス党にとって、幾度か危機がおとずれたのである。たとえば、「一九三二年一一月六日の総選挙では、二百万票と、ライヒスタークの議席三四を失い、議員数は、一九六名に減った。共産党は七五万票を増加し、社会民主党は同数を失い、その結果、共産党の議席は八九から一〇〇にふえ、社会党の議席は一三三から一二一におちた。……国家社会主義労働者党は、いまなお、全国最大の政党だったが、二百万票を失ったことは重大な挫折だった。はじめてナチ党は下げ潮となり、過半数にはるかに及ばなかった点からさらに後退した……」（二七三―二七四頁）。このようなナチスの後退が突如としておこったのは、主としてS・A・（突撃隊）による市民の自由―言論・集会の自由にたいする侵害がベルリンをはじめ各地におこり、ヒットラーとその徒党の本質が、次第に民衆に知られた結果にほかならなかった。ナチの凋落とは逆に共産党の異常な進出、これは当時の支配階級にとって大きな脅威となった。こうして、「社会民主党員、共産党員、ユダヤ人をドイツの指導的地位から追放し、公生活に秩序を回復することが含まれていた」ところのヒットラー・パーペン秘密会談が準備されたのである。このようにして、この「共和制最後の日」は、当時のドイツの支配階級の政治的良心の麻痺的状態と権謀術策の悪らつさをもっともよく物語っている。ナチスによる国会炎上がつぎに来るのである。それは共産党をはじめ左翼政党の徹底的な弾圧の狼火であり、ドイツのナチ化をつげる晩鐘にほかならなかった。

著者は、ニュールンベルク裁判ではじめて暴露された厖大なナチス関係資料を丹念に調査し、新聞記者としての鋭敏な時代感覚、流麗な筆致をもって、本書をまとめあげたものであって、多量の機密文書を使用しつつ、しかもペダンティックに流れず、また啓蒙的であると同時に学究的な手法は、読む者を最後までひきつけてやまない。ただ本書を読んで一寸気になることは、ナチスの抬頭をみちびいた精神的ムードを重視する余り、この当時の与党であったドイツ社会民主党の政策や、共産党の労働者階級にあたえた影響などについてはまったくふれられていない。ワイマール体制の崩壊が、ドイツ社会民主党の政策と密接不離の関係にある以上、これについてほとんど何もふれないのは、まったく片手落ちというほかはない。今ひとつ重要なことは、ドイツ共産党と社会民主党との統一戦線の失敗―それは主として共産党の公式主義と社会民主党の側における右翼日和見主義に帰せられるが―の経緯なども全然ふれていないことである。そのためにドイツ人民のナチス化にたいする抵抗がまったくなかったかのような印象をうけることであり、そういう点を考えると、著者の歴史観は、悲観的・宿命論的なものとして映らざるをえないのは、多少問題であろう。

しかし、やはり面白く読ませるためのドイツ現代史の入門書としては絶好のものというべきであろう。（創元社、一九五六・三・三一、B6、三七三頁、三六〇円）

松田智雄著

『宗教改革』

寺尾誠

長年ドイツ近世初頭における社会経済史研究の先駆者として研究